

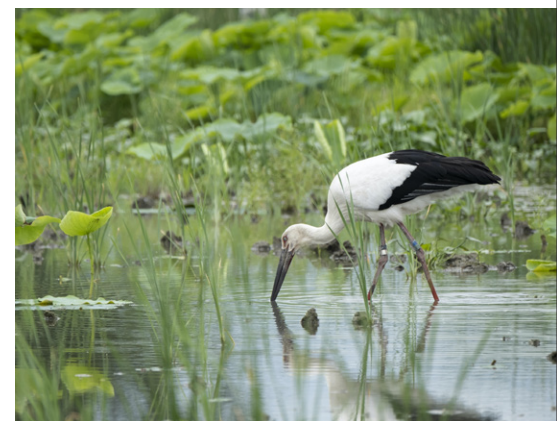
コウノトリが選んだ地は、 レンコン畑だった

一度は絶滅した野生のコウノトリ。2005年から『兵庫県立コウノトリの郷公園』などによって放鳥が始まり、現在約260羽が野生のコウノトリとして確認されている。日本各地で飛来確認がされても、繁殖・生育地は少ないという。コウノトリが生息地として好むのは、餌となる水生動物が豊富な湿地帯だ。

鳴門市を中心とした旧吉野川に近いレンコン産地では、農薬を限界まで減らし、

水路の整備や草刈りなど畑の保全を長年行ってきた。これらの積み重ねは水生動物を守り、豊かな土壌を育んでいた。

鳴門市にコウノトリが定着したのは6年前。餌場として選ばれたのはレンコン畑だった。この地で育ち、自然に優しい農法で作られたレンコンは「コウノトリれんこん」と名付けられた。これからもコウノトリとともに農業を営んでいく。



●問い合わせ先

コウノトリや環境については
特定非営利活動法人 とくしまコウノトリ基金
tel.090-2825-6721

れんこんについては
JA大津松茂 農産物直売所えがお
tel.088-602-7100

JA徳島北 経済部
tel.088-689-1001

自分たちが

育てたレンコンの価値を

伝えていきたい

林恭史さん 枝里さん

鳴門市大津町にて夫婦でレンコンを育てる林恭史さん。祖父の代からレンコン農家だったが、興味はそれほどなかったという。しかし父親の病気をきっかけに家業に向き合い始め、農家に転身する。代替わりしても大きく農法を変化させなかった。「レンコンは他の野菜に比べて、農薬をあまり使わずに栽培できる作物の一つ。この地域では当たり前の栽培方法が自然に優しい農法だったようです」。

徳島県産のレンコンは市場から関西圏へ



色白で美しい林さんのれんこんは『えがお』で販売。シャキシャキとした歯ごたえで、濃厚な香りと味が特徴だ。納品して完売になる日も多い。棚に並べ終えて数分後、お客さんが大きなレンコンを一袋、手に取っていった。

出荷されるのが主流だが、林さんは「丹精込めて育てたレンコンの値段を自分で決め、食べてくれる人の顔が見たい」と8年前から産直市にも出すようになった。現在では鳴門市の『農産物直売所えがお』に卸している。自慢の立派なレンコンはもちろん、市場では規格外となる小さなものを集めた大袋も棚に並ぶ。お徳感があり、子ども

もが食べやすいサイズだと主婦層から好評なのだそう。商品を並べていると、「きれいな色やなあ」「おいしかったですよ」と声をかけられることも多いという。「お客さんと直接関われることはやりがいに繋がる。自分たちが楽しみながらレンコンを育てて、品質を高めながら収穫量を増やしていきたい」と和やかに笑った。

栽培が難しくても、

安心安全なレンコンを

届けたい

野田章さん

して農業に取り組み「エコファーマー」を取得。そして4年前から、さらに栽培基準が厳しい「特別栽培」に取り組むようになり、JA徳島北特別栽培部会長として「コウノトリれんこん」の生産に力を入れる。「化学農薬や化学肥料を50%削減し、有機肥料に置き換えます。害虫のアブラムシ対策や除草は必須なので、特別栽培の基準である農薬の使用回数や量で育てるのは難しい」と話す野田さん。それでも安心できるレンコンを育てていきたいという。

農作業の合間にふと周りを見渡すと、電柱にコウノトリが止まっていたり、畑で餌をついばんでいたりする姿をよく見るのだ

「これからは環境にも配慮した農業が主流になると思います」と話すのは、鳴門市大麻町でレンコン農家を営む野田章さん。およそ25年前に脱サラし、父親からレンコン農家を継いだ。その当時は農業に対する規制も厳しくなかったため、現在の倍近くの農薬を使用していたという。農家になつてから5年ほど経ち、環境保全型農業を知ったことで転機が訪れた。環境保全型農業とは、化学肥料や農薬の使用による環境負荷の軽減に配慮した農業のこと。「安心安全な野菜を消費者は選ぶようになる」と、野田さんは化学肥料や農薬を20%削減



レンコン畑には、コウノトリの餌となる水生動物がたくさん生息。「特別栽培でレンコンを育てるのは難しいけれど、環境を守るためならがんばらんとね」と野田さん。JA徳島北特別栽培部会の「コウノトリれんこん」は、京阪神市場と関東市場に出荷されており、県内での販売も検討中。



そう。野田さんの目は、これからも多くのコウノトリが生息し、農業と共存していく未来を捉えていた。